

◆ はじめに ◆

研究者が自らの研究内容を専門分野以外の人に理解してもらうのは決して容易なことではありません。説明に専門用語を用いれば、同分野の研究者には内容を正確に伝えられるかもしれませんが、他分野の研究者、ましてや一般の人たちには全く伝わらないかもしれません。

専門外の人たちにも、せめて研究の意義だけでも伝えられなければ、共同研究や実用化などへの広がりは期待できません。日本語でも難しいのに、英語でとなるとさらにハードルが高くなるため、専門分野で使える英語の習得を優先し、コミュニケーションのための英語表現の練習がつい後回しになってしまうのは無理からぬことです。

しかし、英語力にも増して、コミュニケーション能力の修得はとても重要です。英語が母国語であるはずのアメリカ人でも、理数系の研究者が英語で専門外の人に「伝える」ことに苦戦しています。

ハーバード大学医学大学院などで理系の学生専門にスピーキングスキルの講義を行っているペンシルベニア州立大学教員のメリッサ・マーシャルは、伝えることの重要性をこのように表現しています。

“Science not communicated is science not done.”

科学の成果を伝えることができなければ、成果を挙げていないも同然だ。

内容の正確さだけを追求し、難しい専門用語を多用した話をしても、その話はごく少数の研究者にしか届きません。誰でもわかる言葉で、誰もが興味をもてるような表現力を身につけることで、自らの研究内容、ひいては自分の考えに関心をもってもらえるのです。

東京工業大学生命情報博士教育院で私が担当した理系大学院学生専用の英語コミュニケーションとディベートのコースでは、このような「誰にでも伝わるコミュニケーション能力」を養成することを目標に講義を組み立てました。これらの講義を受講するのは日本人の学生ばかりではありません。東工大で学ぶアジア圏を中心とした留学生も日本人の学生に混じって講義を受けます。出身国に関わらず、講義を修了すると彼らは口々に言います。「この講義で学んだのは英語だけじゃない。コミュニケーションの仕方も学んだ」と。

重要なのは現在、英語を話す人たちの圧倒的多数が英語を外国語として利用しているという点です。したがって、ネイティブのように流暢に話すよりもわかりやすく話すことの方が、多国籍の人たちが集まる場では遥かに重要なのです。

本書はこの東工大での講義をふまえて、1人でも学べるよう新たに作成したもので、ディスカッションに役立つ英語表現がふんだんに盛り込まれています。テツヤを主人公に据え、外国人研究者たちと研究を成功に導いていく様子を描いています。

本書を使い、繰り返し練習することで、実際に英語ディスカッションの場に置かれたときに、英語でわかりやすく伝える楽しさを実感できることを望んでいます。

著者を代表して
Kyota Ko